

占田ながの

挿絵／田中妨

立ち読み版

お姉ちゃん

はっしょん チュッ!

序章	ねえちゃんのが好きだ！ 大好きだ!!	006
第一章	お主は呪われておる	049
第二章	精力アップで呪いを浄化!!	059
第三章	私は耐えないといけないのに……	100
第四章	ねえちゃん限界！	121
第五章	やりまくり	163
第六章	これが答えだ	207
終章	解けない呪い	232

登場人物紹介

Characters



あさくらはるな

朝倉春那

私立奥泉学園高等部の生徒会長。真面目でクールなところが生徒たちから信頼を集めている。男子生徒からも人気が高く告白する相手が絶えない。



おにみこ

鬼巫女

千年前、都で暴れまわっていたところを神社に封印されたという鬼。幼女の姿をしている。

あさくらなつき

朝倉夏樹

姉の春那に対して、憧れや姉弟愛をも超えた愛情をもつ弟。何度もそれを告白しているが、春那に軽くあしらわれている。

唐突に床に穴が開いた。

「へっ!!」

バランスが崩れる。

「夏樹っ!!」

瞬間、凄く早さで春那が夏樹の身体を支えてくれた。

「あ……ありがとねえちゃん」

「怪我はないか」

「うん」

「よかつ——たあああつ!!」

どうやらかなり床が傷んでいたらしい。ホッとした春那の足下にも穴が開く。

「ねえちゃん!!」

バランスを崩して姉が倒れる。

「くうう!!」

それでも手を伸ばして壺が置かれた台を掴むことで、なんとか春那は倒れずに済んだ。

だが、これによってグラリッと壺が落ち——ガッシヤアアンツと乾いた音を響かせて割れた。

「あっ!!」

その刹那、壺の中からなにやら黒い霧のようなものが溢れ出し、春那の身体を包み込む。

「え？ なに？」

戸惑いの表情を浮かべる春那。

そして――。

春那の身体はグラリッと本殿床に倒れた。

「ね、ねえちゃんっ！！ ねえちゃんっ！！」

夏樹の悲痛な声が響き渡る。

「ちよっ――大丈夫!? ねえちゃん!!」

倒れた姉の背中を支えながら抱き上げ、何度も呼びかけるが、意識を失った春那は呼びかけに答えない。

両手に、ぐったりとした姉の体重が一気にのしかかってくるのを感じた。

それほど重くはない。けれども、ふわっと柔らかな感触が、なんだか艶めかしかった。それとともに鼻腔をくすぐるような甘い香りを感じる。

が、いまはそれを気にしている余裕はない。

何度も何度も繰り返し、

「起きてよねえちゃん！ 起きて……。起きてよ！ ねえちゃん……。は……。春那っ!!」

本殿中に響き渡るような声で呼びかける。

すると――。

「んっ……。んん……。な……。つきき？」

ゆっくりと春那は目を開けた。

「あ……ねえちゃん。だ、大丈夫？」

「大丈夫って……私……どうしたんだ？」

「どうっていきなり倒れたんだよ」

「倒れた？ 私？」

「そうだよ。大丈夫？ どこか痛かったり、苦しかったりしない？」

「ん……いや。大丈夫だ。特に問題はない。心配をかけて済まなかったな」

そう言う姉はゆっくりと上体を起こした。

「ホントに大丈夫？ 目眩がしたりとかない？」

「ああ……大丈夫だぞ」

ニッコリと微笑みを向けてくる。

「——えっ？」

いつもと変わらない春那の笑顔——そのはずなのに、ゾクゾクゾクツとした感触が背筋を震わせる。

（な……なんだこれ？ どど、どういうことだ？）

なんだろう。

何故かよく理由は分からないけれど、いまの春那の姿に普段よりもずっと色気を感じる。（なんか……ねえちゃんの肌……ちよつと赤くなってる？）

どちらかといえは春那は色白なほうである。なのに、頬がなんだかピンク色に染まっているように見えた。うっすらと汗も浮かんでいる。

（それになんだ……目が潤んでみたいな……）

宝石のような瞳がなんだかしつとりとした輝きを放っているように見えた。

見つめられているだけで全身が火照り始めてしまうくらいに、姉ではなく、女を感じる視線だった。

（なんかいまのねえちゃんって……いつも以上に綺麗だなあ……）

その姿に一瞬状況も忘れ、普段以上に見惚れてしまう。

（こんなねえちゃんと恋人同士になれたら……凄く幸せなんだろうな……）

『ん？ なんだ勉強か夏樹』

『あ……うん。ちよつと宿題で』

『宿題って……なんだそれ……。保健体育の宿題だと？』

『そうなんだよ。だけどオレって……ほら……その……保健のこととかよく知らないじゃん。だからその……どう問題を解けばいいのか全然分からなくて……。特にここが……』

『ん？ ああ……子作りの仕方か……。確かに、これはなかなか難しいかもな』

そう言うとき春那は腕を組んでうくと唸り、

『よし』

うんつと何かを決意したように頷く。

『どうしたのねえちゃん？』

『どうしたもこうしたもない。この分からないところ、私が教えてやるよ』

『いいの？』

『もちろんだ。可愛い弟——いや、恋人の為だからな』

『ありがとうねえちゃん』

『いって別に……』

フツツと笑うと、春那はなんの躊躇もなく夏樹の下半身に手を伸ばしてくる。

『え？ ね、ねえちゃん？ なな……何を……』

『何って……だから子作りを教えてやるんだよ』

『だけど……その……どうしてお……オレのその……股間を触ってるの？』

『どうしてって……言葉で言っただけ上手く伝わらないだろ？ だから……私が直接教えてやるうと思っ』

『ね……ねえちゃん……』

(つて、バカバカバカバカバカあつ!!)

そこで慌てて首を何度も左右に振り、妄想を振り払う。

(いまはそんなこと考えてる場合じゃないだろ。ねえちゃんが倒れたんだぞ。大丈夫そう

「だけどもずはお医者に行くのが先決だ！ 下らないこと考えるなっ！！」

必死に自分に言い聞かせ、理性的であろうと努める。

「あ……あのさねえちゃ——」

春那に声をかけるのだが、それは途中で止まる。

何故なら、目の前の春那の視線が自分の股間部に向けられていたからだ。

妄想によって膨らんでしまっている下腹部に……。

「ほっ！ ほぎゃああああっ！！」

悲鳴を上げ、両手で下半身を隠すと、

「あ……これはその……あの……な……何かの間違いで」

慌てて言い訳の言葉を吐き出した。

「それ……私を見てそんな風になったのか？」

「——へ？」

が、姉の言葉はまるで夏樹が予想もしていないものだった。

「それってその……ぼ、勃起……だろ？」

「ぼ……勃起……」

姉のこと口から飛び出した露骨な言葉に、ドキッドキッと胸が激しく脈打つ。春那の言葉だけで、頭がクラクラしそうだった。

「違うのか？」

「あ……いや……違わない。違わないよ」

「……そんなに大きくなるくらい……私で興奮してるのか？」

「え……あ……その……」

（どどど、どういうこと？ わ、わけが分からないぞ。なんでねえちゃんがこんなこと聞いてくるんだ？ な、何かのどつきり？）

まるで状況が理解できない。

「どうなんだ？」

とはいえ、悩んでいる時間はあまりなさそうだった。

（ええ〜い、なるようになれ！）

「あ……う……うん……。そ……そうだよ」

実際春那で妄想してこうなったのは事実だ。姉に対して嘘をつくわけにはいかないの
素直に頷く。

「そうか……それって……。つまり、そんなにペ……ペニスが勃起するくらい、私のこと
が好きってことなのか？」

「ペペ……ペニス!？」

露骨すぎる言葉——これまで妄想したことはあれど、実際聞いたことのなかったエロワ
ードに、いきなり意識がぶっ飛んでしまいそうなほどの衝撃を覚える。

「どうなんだ？」

「え……あ……。そ、そうだよ……。いつも言ってるじゃん。ねえちゃんのことを好きだつてさ」

「……そうか……。そういえばそうだったな」

フフツと春那は口元に微笑を浮かべる。

「済まなかつたな。いままでお前の思いに伝えてやれなくて……」

そう言うと、春那はしゃがむ夏樹に身を寄せてくると、手を伸ばし、ジャージのズボン越しに勃起した肉棒に触れてきた。

「ひゃっ！ あっ……。ね、ねえちゃん？」

全然状況が掴めない。

どうしてこんなことになっているのか？

何故突然姉がこんな態度を取ってくるのか？

まるで理解できなかつた。

（もしかしてどつきり？）

なんてことを考えるが、当然周りにカメラがあるようには見えない。

（つてことはつまり……。もしかしてこれって……。ねえちゃんが……。ねえちゃんがやつとオレの気持ちに伝えてくれるつもりになったってこと？ ホントに……。ま、マジで……）

リンゴ〜ンリンゴ〜ンつと脳内で鐘が鳴り響く。

その幸福を裏づけるように、

「ズボンの上からでも分かる。はあああ……。凄く硬く……。熱くなってる。なんだか苦しそうだ。私が……。いま楽にしてやる」

なんて熱い吐息混じりの言葉まで向けてくる。

「い……。いいのねえちゃん？ ホントに？」

はつきり言って昇天してしまいそうなくらいの幸福感を覚えながら、姉に改めて問う。

「もちろんだ」

すると春那はニッコリと、優しく微笑んでくれた。

その笑みに一点の曇りもない。

「優しく私が教えてやるからな」

「あ……。う、うん」

下半身だけじゃなく、全身をガチガチに硬くして電池式人形みたいにコクリッと頷いた。同時に腰を下ろし、男なのに情けないけれど、いわゆるM字開脚みたいな姿勢を取る。

「ふふふ……。可愛いぞ夏樹」

そんな夏樹に対して嬉しそうに微笑みながら、シュツシュツシュツとズボンの上から勃起した屹立を撫で回してきた。

姉の細指が、ツツツツと優しい動きで肉茎を擦ってくる。

「くっ……。うあああつ」

ほんの少しなぞられただけでしかない。けれど、普段自分でしているのとは比べものに



ならないほど、ゾクゾクツとした性感が走る。数度撫で上げられただけだというのに、下半身が蕩けてしまいそうなくらいだった。

「気持ちいいのか？ ビクツビクツと動いてるぞ」

「う……うん。気持ちいい。ねえちゃんの手……すごくいいよ」

「そうか……。なら……もつと気持ちよくしてあげるからな」

なんてことを言うと、そつとズボンを下ろしてくる。

剥き出しになるボクサーパンツ。これも姉の手で躊躇なく引き下ろされ——勃起した肉棒がビヨンツと飛び出した。

「……思ったよりも大きいな。それに……先っぽから汁が出てるぞ。これがカウパー液という奴か？」

硬く屹立するペニス——その先端部からはすでに半透明の先走り汁が分泌されており、肉先はしつとりと濡れている。呼吸に合わせるように蠢く亀頭が、肉汁で妖しく輝いた。

「私でこんなにしてくれるのか……。嬉しいよ夏樹」

「ね……ねえちゃん」

姉の言葉に胸がつまる。

より興奮が高まり、さらにペニスが大きく膨張していった。

「また大きくなった。ふふ……夏樹も大人になったんだな」

なんてことを言いながら、そつとペニスを握り締めてくる。

(ね、ねえちゃんが……。ねえちゃんがオレのを握ってる……)

夢にまで見てきた光景だった。

細指の一本一本が肉茎に絡みつく。グチュリツと分泌液で掌が濡れることも厭わない。姉の温かな体温が、ペニスに伝わってくるのを感じた。

指の感触——ただそれだけで、熱いものが下腹部からこみ上げてくる。肉棒がビクビクと震え、亀頭が大きく膨張していった。

「だ——駄目っ！」

瞬間、ただ触れられただけでしかないというのに、肉棒は興奮の極致に達してしまう。

ぶびゅっ！ どびゅっどびゅっどびゅっ——ぶびゆるるるうっ！！

亀頭が破裂しそうなほどに膨れ上がったかと思うと、肉茎を激しく痙攣させながら白濁液を撃ち放った。

「あっあっあああああ」

我慢に我慢を重ねた排尿時にも似た性感が全身を包み込む。

下半身が蕩けてしまいそうなほどの性感を覚えながら、ビクッビクッとひたすら熱汁を飛び散らせた。

やがて射精が終わる。

「凄いな……。こんなに射精するなんて……。話には聞いたことがあったんだが……。想像以上だ。私の手にべっとりついてるぞ……。それに眼鏡まで……」

「ちよ、ちよっと！ 私は大丈夫だと言ってるではないですか！」

「うむ。分かるとるよ。じゃから無理に呪い浄化の儀を行うつもりはない。じゃが、念のために保険は必要じゃろ？ もし主が耐えられなくなった時の為じゃ」

鬼巫女さまの言葉は正論だった。

流石の春那も何も言い返せない様子で「ぐぬぬぬ」とほぞを噛むと、プイッとすねた子供みたくにこちらに背を向け、体育座りをし、

「か……勝手にしてください」

いじけたみたいに呟く。

可愛い。

「うむ……。というわけで始めるぞ夏樹よ」

「は……はい。それでその……。どうするんですか？」

春那の為とはいえ、流石にちよっと緊張する。

すると鬼巫女さまは「そう硬くなる必要はないぞ」といつてよしよしと頭を撫でてくれた。完全に子供扱いである。

「儀式の内容は簡単なものじゃ。ワシの精気を夏樹……主に与える。ワシは鬼……人を遥かに超える力を持つておる。その力で主の持つ力を増幅させるといわけじゃ」

なかなかそれっぽい説明である。

ただ、重要なのはそれをどうやって行うかだ。

なんてことを問いかけるような視線を向けると鬼巫女さまは、

「簡単なことじゃ……ワシと交配……。まぐわつてもらおう」

などと事もなげに言ってきた。

「交配？ まぐわう？ え？ そ、それつてまさか……せ、セックス？」

「そうとも言うな」

キセルを吸って、白い煙を吐き出しながら頷く。

「ちよっ、そんなの駄目です！ 夏樹もそんなことをしては駄目だぞ!!」

これに対して激しい反応を示したのは春那だった。

「お堅い奴じゃのう……。まあ主がなんと云ったところで、やるかやらぬかを決めるのは

夏樹じゃからな。さて、夏樹よ。主はどうする？」

話がこちらに振られる。

「ど……どうつて……それは……」

チラッと姉を見る。

春那はジッとこちらを見ていた。

なんだか目がうるうると潤んでいる。

(信じているぞ夏樹！)

視線がそう訴えているように見えた。

(や……やっぱり不味いよね……)

姉の為とはいえ、姉以外とセックスするなんて考えられない。いや……別にしたくないわけではないけれど、姉の前でするってのはちよつと……。

だけど……。

(け、結構鬼巫女さまも可愛いんだよな)

ちっちゃくてなんだかお人形さんみたいところに、惹かれるものを感じる。

そりゃ胸はツルペタだし、どこからどう見ても子供でしかない。だというのに、巫女装束の端々から覗き見える白い肌に、なんだかイヤらしいものを感じる。思わずゴクリッと息を呑んだ。

(つて、駄目だ駄目だ。ねえちゃんをうら——)

「——ぎることはできない？　なんて考えておるじゃろ？」

まるで心を読んだかのように、ボソリッと鬼巫女さまが耳元で呟いてくる。

「どど、どうしてそれを？」

「それくらい分かるわ。主は単純そうじゃからな」

「た……単純つて……ま、まあそうかもしれないですけど……。でもその……俺の気持ち
はそ、そういうことです」

なんにせよ直接伝える手間は省けた。

「そういうことか……。本当に姉のことが好きなんじゃのう」

「そうですよ。好きです。ねえちゃんのことを世界で一番。だから……裏切れないです」

春那にも聞こえるようにきつぱりと拒絶する。

「な……夏樹……」

お、なんかちよつとねえちゃんが感動しているようにも見えるぞ。この選択は当たりか？

「いや……外れじゃ」

また心を読まれてしまう。

「確かに主の気持ちは立派じゃ。じゃが……その選択のせいで姉がどこぞの者とも分らん者に抱かれるようなことになってもいいのか？」

「それは……いやです！」

絶対にイヤだ。

そんなことになつたら多分もう生きてはいられないだろう。

「じゃろ？ であれば、ワシの提案を受け入れよ。確かに……いまのこの瞬間は春那を裏切ることになるかもしれない。じゃが、それこそが春那の為なのじゃ。いざという時に春那を救えるのは主だけなんじゃぞ！」

「……それは……」

確かにそうかもしれない。

たとえいまの一時裏切ることになつたとしても、後々姉を救うことができるのならば……

「おい夏樹！ 流されるな！ 私は……私は大丈夫だから」

必死に自分大丈夫アピールをしてくる姉。

そんな春那に對し、

「ごめん。これもねえちゃんの為だから」

きっぱりと言いきった。

「そんな……夏樹……」

がっくりと肩を落とす。

その姿にズキズキと胸を痛めつつも、真っ直ぐ鬼巫女さまを見つめ「お願いします」と頭を下げた。

「うむ。よかろう。よく決断した。その決意に免じて、最高の快楽を与えてやるぞ」

「さ……最高の快楽……」

ゴクリッと息を呑む。

見た目は子供、頭脳は大人——その名も鬼巫女さま。

どこからどう見ても子供にしか見えないのに、瞳を細め、艶やかな唇を歪めて笑う姿は、やっぱりどこかイヤらしい。艶めかしい。淫靡だよ鬼巫女さま！

「それでその……オレはどうすれば？」

「どうする必要もない。そこでジツとしておれ」

などと言いながら、座っている夏樹に鬼巫女さまが近づき、そつとズボンに手を添えたかと思うと、先程春那がしていたようにズボンの上から股間部を小さな手で撫でてきた。

「くっ」

細指がズボン越しではあるけれどペニスに絡みついでくる。子供に股間を触られる——姉とのセックスとはまた違った背徳的なものを感じ、思わず身体がピクリッと震えた。

「わ……私はもう知らないからな！」

夏樹の晒す姿に顔を赤くしたかと思うと、本殿の隅まで春那は移動し、こちらに背を向ける。

「なんじゃ？ 出てはいかぬのか？」

「な……夏樹が心配だからそういうことはしません」

なんてことを言いつつ、両手で耳を押さえる。

この状況でも自分を心配してくれている——そのことが純粹に嬉しかった。

「いい姉じゃな」

「はい！」

「では……そんな姉上の為に、存分に気持ちよくなるがよいぞ」

シュツシュツシュツと衣擦れ音を響かせながら、何度も何度も淫部を撫でてくる。股間を撫で回すという行為自体は姉とほとんど変わらない。

だというのに、春那の時よりもねっとり指が陰茎に絡みついでくるような気がした。シュツシュツと上下に擦り上げられるだけで、下腹部が熱く火照り始める。

「どうじゃ？ 気持ちいいか？」

フフツと鬼巫女さまが笑いかけてくる。

見た目は子供ではあるけれど、吐き出される吐息や、巫女服の間から覗き見える白い肌にはやはり妖艶なものを感じた。

別にロリ趣味があるわけじゃないけれど、金色の瞳を見つめていると惹き込まれそうなほどに淫靡なものを感じる。蠢く艶めかしい指を見ていると、自然と肉棒がムクムクと硬く屹立し始めた。

「ふふ……主の魔羅が大きくなってきたのを感じるぞ。そんなにかうして撫でられるのがよいのか？」

「……は、はい」

快楽を否定することなどできない。

「そうかそうか……。素直なのはいいことじゃぞ。では、そんな素直な夏樹に褒美じゃ。より強い愉悦を与えてやるとしよう」

「より強い？ 何を……？」

「もちろんこうするんじやよ」

鬼巫女さまは口元に妖しげな笑みを浮かべつつ、ズボンの中に手を突っ込んでくると、直接夏樹のペニスに指を這わせてきた。

「うくっ！ あっ……うあああっ！！」

細指が肉茎に絡みつく。指の一本一本がペニスをしっかりと握り締めてきた。途端にビ

クツビクツと全身が跳ねるように反応する。

「結構敏感なのじゃのう……。なかなか可愛い反応じゃ。そういう男の子……。ワシは嫌いではないぞ。ほれ……。こういうのがいいんじやろ？ ほれっほれっほれっ……。」

嬉しそうな表情を浮かべつつ、優しく何度も肉棒を扱ってきた。

人ではないからだろうか？ 肉棒に吸いついてきそうなほどに掌は柔らかい。柔肉に包まれているような感覚を覚える。正直これだけですぐにでも達してしまいたいそうだった。

ぐちゅっぐちゅっぐちゅっぐちゅっぐちゅっ……。

すぐさま肉先からは先走り汁が分泌され始め、卑猥な音を奏で始める。

「肉汁がたくさん出ておるぞ。ワシの指がグチャグチャじゃ」

ズボンの中から手を引き出し、濃厚汁に塗れた指を突き出してきた。しかも、

「んちゅっ……。ぺろお……」

挑発するような視線をこちらに向けながら、指を濡らす肉汁に舌まで這わせる。

「しよっぱいのう……。じゃが、嫌いな味ではない……。ふふ、こうして男のものを味見するのは一〇〇年ぶりじゃ……。ふふ……。なかなか興奮するぞ」

見た目だけが幼い少女が自分の肉液を舐めるといふ姿に、下腹部がさらに熱く熱を持ち、ビクンツビクンツと何度もペニスが震えた。

「あの……。お……。鬼巫女さま……」

「なんじゃ？ もう我慢できなくなっただのか？」

「す……すいません」

「別に謝る必要はない。健康である証拠じゃ。それに……ワシももう準備はできてる」
そう言うのと鬼巫女さまは帯を外し、袴を下ろす。

すると下着は穿いていなかったらしく、すぐに淫部が露わになった。

一切毛の生えていない。本当に子供のもののような秘部。

だどいのに、秘裂は春那以上にクパッと左右に開き、淫らな花を咲かせていた。

覗き見えるピンク色の柔肉は、溢れ出す愛液でグシヨグシヨに濡れそぼっている。呼吸するように媚肉がゆつくりと蠢いているのが分かった。春那の汚れを知らなかった性器とは違う。男の味を知り、牡を求める女の秘部だった。

幼い少女と淫靡な肉壺——そのアンバランスさに本能が疼きだす。

「さあ、どうやってしたい？」

「え？ あ、そ……それじゃあ……お、オレが上になってもいいですか？」

「もちろん構わぬぞ。さあ、たつぷりワシの身体を味わうがいい」

鬼巫女さまは床に仰向けに寝転がると、脚を左右に大きく開く。これに合わせて陰唇もより開き、さらに鬼巫女さまの秘所が露わになっていった。

（我慢なんかできない……。挿入れる……。するんだ。セックス……するっ!!）

ズボンを下ろし、肉汁塗れになったペニスを剥き出しにする。

先程春那に対して二度も射精したばかりにもかかわらず、ギンギンにたぎり、屹立して

いる肉棒——これを見て嬉しそうに鬼巫女さまが微笑む。

「ふふ……思ったよりも大きいのが。ワシはこれまで何度も男とまぐわって来たが、その中でも主ほどの魔羅の持ち主はいままでおらんかったぞ」

いままで——こうして何度も鬼巫女さまはいままで男達とセックスしてきたのだろうか？ この幼い身体で……。

そう考えると、なんだかより興奮が高まって来た。

「い……いきます！」

「いいぞ……さあこい……」

鬼巫女さまに促されるがままに、肉先をクチュリツと膣口に押しつける。

「んっ」

ピクツと僅かに鬼巫女さまの肢体が震えた。肉褌がペニスに絡みついてくる。

「そのまま腰を下ろすんじゃ」

「は……はい」

鬼巫女さまの言葉に頷き、腰を突き出す。

ぬじゅっ……。ぐぶじゅるう……。

「んっ……んんんんっ……よいぞ。なかなか気持ちいい……」

十分濡れていたお陰か、ズブズブと肉槍は簡単に蜜壺へと沈み込んでいった。トロトロとした媚肉がギユウウツと肉茎を締め上げてくる。



「どうじゃワシの膣中は？」

「は……はい。凄く……すごくいいです」

体格のせいかな春那の膣よりも鬼巫女さまの蜜壺のほうが狭かった。けれどもギユウギユウ締めつけてきた姉の性器とは違い、ヌルヌルと妖しく絡みついてくる。

「そうか。では……そのまま腰を前後に動かすのじゃ。ほれ……主の魔羅でワシの膣をかき回してみせよ」

「こ……こうですか？」

素直に従い、腰を振り始めた。

ぐちゅっぐちゅっぐちゅっぐちゅっ。

淫靡な音を響かせながら、何度も何度も腰を前後に振った。

「んっんっんっ……ふふ……うむ。ワシの奥まで届いているぞ。その調子じゃ。ほれ、もっと早く腰を振ってみせい」

「は……はいっ！」

ズンズンズンッと肉槍で繰り返し膣奥を突く。ドチュツドチュツと抽挿音が響き渡るたび、鬼巫女さまの小柄な肢体が上下に揺れ動いた。

このピストンに合わせるように、さらに肉壺の締めつけも激しくなっていく。膣道を肉槍で擦り上げるたび、蜜壺が収縮してくるのが分かった。

「すごい……。よ、よすぎます。オレ……が、我慢できそうにない」

「ね……ねえちゃん？」

問いかけながら一個だけドアが閉まった女子トイレに近づいていく。

瞬間、ガチャッと内側からドアが開き、グイッと夏樹はトイレの中に引きずり込まれた。

「わっ……わわわわわっ」

そのまま無理矢理便器に座らされる。

「はあっはあっはあっ……夏樹……夏樹い……」

目の前には荒い息を吐きながら、顔を紅潮させている春那の姿。

制服は捲り上げられ、乳房が剥き出しになっていた。たゆんつと揺れる胸は汗に塗れている。乳頭は痛々しいほどに勃起していた。

そして下半身——床にはショーツとスカートが脱ぎ捨てられており、秘部が剥き出しになっている。秘裂は当然左右に押し開き、肉壁が完全に覗き見えていた。クパッと開いた膣口から、ポタポタと愛液が垂れ流れている。

（す……凄い……）

姉のものとは思えないただれた姿にゴクリッと息を呑む。

同時にいまにも泣きだしそうに見えるくらい、どこか弱々しくも感じる姿に守ってあげたいという想いが強くわき上がってくるのを感じた。

「待ってたぞ夏樹……。もう……耐えられないんだ。だから……済まない……」

そんな夏樹に対して春那は謝罪しつつ、カチャカチャとズボンのベルトを外してきたか

と思うと、躊躇なく引き下ろしてきた。当然のように下着も脱がされる。

乱れた姉の姿を見ただけで痛々しいほどに勃起した肉棒が、容赦なく剥き出しにされた。

「はああああ……。これだ。これが欲しかったんだ」

うっとり瞳を細め、熱い吐息を姉は漏らす。

「い……。いくぞ……」

こちらの反応などほとんど見ていない。

そうすることが当然というように、こちらの身体に跨がってくると――。

ぐじゅっ！ ぬじゅるるるうっ。

「くっはっ！ あっあっあんんんん」

躊躇ためらいなく肉棒を濡れそぼった蜜壺で啜え込み始めた。

「ああ、すっげ、すげえ絡みついてくる。ねえちゃんの腔中――トロトロになってる」

姉が呪われて以来何度となく繋がってきたが、今回のペニスに対する肉襞の絡みつきは、いままで以上に濃厚なものだった。

ヒダヒダの一枚一枚が、まるで別の生物のようにペニスを締め上げてくる。下半身が春

那の胎内で溶かされていくような気さえた。

「あつふ……。はあああああ……。挿入ってくる。な、夏樹のが挿入って――くっふ……。ん

ふうううう」

肉棒が沈み込めば沈み込むほど、春那の肢体は痙攣していく。それとともに肉壺が尋常

でないほどにペニスを締め上げてきた。

「ふうっふうっふうっ……」

かなり感じているのか、姉は切なげな表情を浮かべながら肢体を戦慄させる。それでも必死にトイレということで声を押し殺そうとする姿に、抑え込むことができないほどに射精衝動が増幅してくるのを感じた。

「ねえちゃんの膣中……よすぎる。こつれ……無理だ。すぐに……すぐに射精ちやうよ」
「いいぞ……射精せ……ふっぐ……ふー。ふー。ふー。膣中に……膣中に射精してくれ」
「ずじゅうっ！」

射精を求める言葉をこちらに向けながら、腰を一気に落とし、膣奥までペニスを飲み込んでくる。肉先がズンツと子宮口を叩いた。

「ふっぐ……んんん！ ふうっふうっふううう……だ、めだ……抑えられない。あああ……声……でてしまう！ あっあっあっ——いい……奥叩かれるのよすぎる……ああああ！ き、気持ちいい。絶頂く！ あああ……絶頂つく……絶頂くうううっ!!」

瞬間——挿入だけで限界を迎えた春那は、嬌声を響かせながら達する。

絶頂に合わせて収縮する蜜壺が、ただでさえいつ射精してしまってもおかしくない状況にある肉棒を、押し潰さんばかりの勢いで締めつけてきた。

「くああっ！ 駄目だ！ 射精るッ！ ねえちゃん……射精るよっ!!」

下半身だけでなく、全身が春那と一つに蕩けあっているかのような感覚に、我慢などで

きるはずがない。

ドビュッ！ ビュッビュッビュッビュッ、ビュブバアアアア！

「ふっひ！ あっ、き、きたっ！ あっあっあっあああ！ きたあっ♥ 熱いのが、せーえきが私のなつかに、射精てる！ すごい、たくさん——腹の中が熱い汁でいっぱいになっっていく。あっあっあっあっあっ」

肉茎を脈動させながら白濁液を撃ち放ち、膣中を濃厚汁で満たしていく。この感覚にさらなる快楽を覚えているのか、より春那の漏らす嬌声は甲高いものに変わっていった。

「……ま、まだだ……。まだ足りない。もっと……もっとだ夏樹。もっと……もっと私を感じさせてくれ。もっと……もっともっともっともっともっと……」

しかし、これでもまだ春那は満足できないらしく、そのまま腰を振りたくってくる。ずじゅっずじゅっずじゅっずじゅっずじゅっずじゅっ！

「ちよっ、ねえちゃん。いまは……いまはまだ射精てる。まだ射精てるから！ 少し……少し休ませて！」

未だ射精が続く肉棒を締めつけられながら擦り上げられる感覚に、流石の夏樹も声を上げてしまう。

「あっあっ……済まない夏樹……。駄目なんだ。耐えられないんだ。もっと……もっと気持ちよくなりたいんだ。だから、止まらない。ごめん夏樹……」

けれども姉は止まってはくれなかった。

それどころか、一振りごとにグライド速度は上がっていく。まるで女を犯す男のような勢いだっただ。

思考力が蕩けてしまいそうなほどの愉悦が全身を包み込んでいく。

吸いついてくるような肉壺によって、胎内にあるすべてのものを吸い出されていくような錯覚さえ感じてしまっていた。

「感じているのか私で？ い、いいぞ……もつと……もつと私の身体で気持ちよくなってくれ。私も……お前が感じてくれていると嬉しい。ほら……こういうのがいいんだろ？」
腰を振りながらギユウツと夏樹の身体を抱き締め続ける。ちようど柔らかな乳房に頭が埋まるような形になった。左右から柔肉が圧力をかけてくる。

「ね……ねえちゃん！ あああああ!!」

大胆すぎる姉の行為にタガが外れる。

れるっ！ くちゅっ！ ぺろっぺろっぺろっぺろ、ちゅばああ……。

「あつふ！ くひっ！ あっあつ、それ、それいい！ いいぞ夏樹。もつと、もつとだ。もつと舐めてくれ！ もつともつともつと！ ふひっ！ あひああああつ!!」

舌を伸ばし、乳房を舐める。舌先で胸をなぞりつつ、美しい姉の肌をグシヨグシヨの唾液塗れにしていく。同時に乳頭を咥え、頬を窄めてジュルルツと吸った。

そうして乳房に対して愛撫を行いつつ、春那の動きに合わせて腰も振る。座っている状態でありそれほど激しい動きはできないが、小刻みに腰を震わせ、ズンズンズンツと

が、なつつっきの熱いのが私の膣中に来たあ♥」

射精に合わせるようにまたも肉壺が収縮し——。

「んっひ……あひあっ！ ひっひっひっひ——ふひひひひひ♥♥♥」

春那も再びの絶頂に至った。

二人は抱き合いながら互いに肢体を震わせあう。姉の肢体から溢れ出す汗が、制服に染み込んでくるのが分かった。

「はあっはあっはあっはあ……。すご……凄かったよねえちゃん。最高に気持ちよかった」

「私もだ……。気持ちよすぎて頭が変になりそうだぞ……。でも……」

「でも？」

「なんだと言うのだろう？
「まだ……まだ足りない。まだ足りないんだ。まだ疼くんだ。これだけじゃまだ……。だから……もつと……もつとしていいか？ もつと夏樹で気持ちよくなりたいんだ」

潤んだ瞳をこちらに向けながら問うてくる。

「上気した肌に潤んだ頬。唇の端から垂れ流れ落ちる唾液——普段の姉からは想像もできないほど女を——いや、牝」を感じる表情だった。

「こんな表情を見せつけられて我慢なんかできるはずがない。」

ここが学校。しかも、下手をすれば誰かが来かねないトイレの中だということも忘れたように、夏樹のペニスを食べるように、春那が腰を振りたくってくる。

嬌声を上げる春那の肉壺に何度も何度も白濁液を流し込んだ。

けれど、幾たび達しようが満足することはできない。もつと味わいたい。もつと姉の身体を食りたい——わき上がる欲求に流されるように、夏樹は春那と交わり続ける。

「こんな……格好恥ずかしい……」

ただ座位で繋がらあうだけではない。

「綺麗だよ」

優しく語りかけながら便器の上で四つん這いになった姉の秘部に、肉槍を近づけていく。クパッと開き、ゴポオッと流し込んだ白濁液を零す膣口に龟头を添えると、そのまま容赦なく膣奥まで犯した。

ずぶじゅっ！　じゅばんっじゅばんっじゅばんっ！

「あっ！　また、また挿入してきた。また私の膣中に……あふあああ！　奥まで、これ……奥まで届く！　あっあっあっ……ずぼずぼま〇こをかき混ぜられてるのいい♥」

腰と腰をぶつけあう。

パンパンパンッと乾いた音を周囲に響かせながら、ひたすら肉奥を抉り続けた。

「深すぎるこんなすぐ……また……。わったし、また……またああっ！」

「オレも……オレもだよねえちゃん。オレももう我慢できない。ねえちゃんの膣中に射精

す。たくさん流し込む。だから……受け取って……ねえちゃん!!」

もう幾たびもこうして繋がりがあっているというのに、するたびに姉の肉壺から感じる快楽は大きくなっていく。

何度射精したところでこの性感に耐えることなどできはせず――。

「くあっ! くふああああっ!!」

ドビュババアッ!

またも膣中に多量の牡汁を流し込んだ。

「あひあっ! ふっひ――むひひひひひ♥♥♥」

熱汁を流し込むと、条件反射のように春那は達する。

白濁液で肉壺を満たされるといいう行為に、快楽を抑えることができないといった様子で、狂ったように絶頂きまくる。

壊れた玩具のように全身を痙攣させながら、アクメ声を周囲に響かせた。

「ねえちゃん! ねえちゃんねえちゃんねえちゃんっ!!」

しかし、まだ……まだ満足できない。

もっともっともっともつと姉を乱れさせたい――達すれば達するほど、欲望はさらに増幅しているようだった。

「ちようだい……私に夏樹のを流し込んでくれ……」

それは姉も同様らしく、快楽を求めてくる。

互いに互いを求めあう——身体だけでなく心まで一つに繋がっていくような気がした。だから腰を振る。

射精を続けながら、姉の絶頂をペニスで感じながら——ひたすらひたすら肉穴を痛々しいほどに硬く、熱く屹立した肉槍で蹂躪した。

「あつあつあつあつ、動いてる！ 絶頂きながら——だっししながら、動いてるう♥ 感じる！ 感じるぞ夏樹い！ もつともつと私を気持ちよくしてくれ！ もつと絶頂かせてくれえ♥」

ジユブジユブという肉と肉が交わりあう音が、トイレの中に響き渡った。

*

「はあはあ……。こんなにグチャグチャになって……。私が……。き……。綺麗に……。はあっはあ……。し、してやるからな……」

それから何度となく膣中射精を終えた夏樹は、再び便器に腰を下ろしていた。

愛液と自分が射精した精液でペニスはドロドロになっている。少なくとも数十回の膣中射精を終えたあとにもかかわらず、未だ勃起し続けていた。

そんな肉槍に未だ発情したままの春那が——クパッと開いた肉壺からドロドロと流し込まれた肉汁を漏らしつつ——優しく唇を寄せてくる。

「男は……。こ……。こうされるのがいいんだろ？」

妖艶にこちらに語りかけながらそつとピンク色の舌を伸ばすと、姉は硬く屹立する肉槍

に絡みつけてきた。

にちゃっ……。くちゆるう……。

「あっ！ くあああっ」

ねっとりとした粘りけを帯びた感触に全身が震えてしまう。ピクンッピクンッと跳ねるように反応するペニス。

「ふふ……結構可愛いな……。こうか？ こういうのがき……気持ちいいのか？」

嬉しそうな表情を浮かべるとともに、肉槍全体を汚す肉汁を舐めとろうとするように、レロツレロツレロツとペニス全体を舐め上げてくる。

「ね……ねえちゃん……ねえちゃんがこんなエロいこと……」

姉のあまりの乱れた姿に驚きさえ覚えるが、それはほんの僅かな時間でしかない。

「うあっ！ い……いい。気持ち……気持ちいいよねえちゃん」

ただれた姉の姿により性感を増幅させ、身悶えた。

「そうか？ ふふ……んれろっ……んちゅっ……れろっれろっ……ちゅぷっ……んれろお……ちゅろっ……むちゅろお……」

まるでアイスを舐めるように、ペロツペロツペロツと断続的に与えられる刺激。裏筋を舐め上げ、カリ首を舌先でなぞり、円を描くように亀頭を舐めてくる。

抑えきれぬ愉悦に「はああああ……」とうっとりしたような息が漏れた。

「ふふ……んちゅっ……ちゅつちゅつちゅつちゅっ……」

舐めるだけじゃない。

唇へのキスは許してくれないのに、亀頭へはこれでもかというくらいに口付けの雨を降らせてきた。

啄ついはむようなキス。

唇と亀頭が密着するたび、濃厚な粘液が春那の口唇を汚す。ニチャツニチャツと何本も粘液の糸が伸びた。

淫らな姉の姿に絡みつく舌の感触——蕩けそうなほどに心地いい。

しかし、散々姉の身体を貪り続けた夏樹には、これだけではまだ性感が足りない。もどかしさすら覚えてしまう。

そのことを視線で訴える。

「分かってる……。いくぞ……」

すると春那はニツコリと笑い——。

「んじゅっ！ んっちゅ……んもっ……んもおおっ！」

ぐじゅっ……じゅずぶるるう。

躊躇なく肉槍を咥え込んできた。

「うあっ！ す、凄い……凄いよねえちゃん」

生温かく柔らかな感触に肉棒が包まれていく。

「んふふ……ろうら？ きもひいいか？」

「いい……いいよねえちゃん。凄く気持ちいい」

姉の口腔に肉棒が蕩けていくような愉悅を覚える。蠢く舌で舐め上げられるだけで、身体だけでなく心までがドロドロにされていくような気がした。

「そふか……にやら……もつろ……もつろきもひよくしてやるからな……」

ペニスを啜えられたまま口を開かれるだけでも、下腹部に愉悅が広がり、肉棒が戦慄く。
「んふふ……」

この反応に嬉しそうな表情を浮かべながら――。

「んじゅぽつ……んつちゅ……ちゅぽつちゅぽつちゅぽつ……んつふ……はふう……んもおお……」

口唇で肉茎を扱くように、姉が頭を前後に振ってきた。

「んぽつんぽつんぽつ……ろ、ろうら？ んじゅるる……。こんな感じれいか？」

特別な技巧があるわけではない。唇を窄め、ジュボツジュボツと頭を前後に振つてくるだけだ。時折頬を窄めてジュルルルッと吸引行為を行ってきたりもするが、明らかに春那の口淫は拙いものだった。

それでも――大好きな姉が自分のペニスを啜えていると考えると、それだけで性感が増幅していく。

もっと欲しい。もっと喉奥まで突き込みみたい。欲求がより大きくなっていく。すると春那は口端から唾液が零れ落ちることも厭わず、夏樹の求めに応じるように喉奥

まで肉棒を咥え込んでくれた。ズンツと奥まで肉先が届くたびにキュツと口唇が窄められ、よりきつくペニスが締め上げられる。自然と「はああああ」と愉悦混じりの息が漏れた。だが、これだけではまだ射精には足りない。

もつと、もつともつともつと姉の口を堪能したかった。

ずじゅっ！

「——おぼっ!？」

その欲求が爆発し、思わず腰を突き出してしまう。

「あ、ごめん……」

苦しげに春那の腫が見開かれたことで、自分がしでかしてしまったことに気づく。

「い……いいじよ……。な、なちゆきがひたいようにひてくりえ」

しかし、姉は決して怒ったりはせず、それどころか優しく微笑みさえ浮かべてくれる。

「ね……ねえちゃん！ ねえちゃんっ!!」

こんな顔を見せられて我慢などできるはずがなかった。

ずじゅっ！ ぐじゅっぐじゅっぐじゅっぐじゅっぐじゅっぐじゅっ！

「もつぽ!! おつぶ……もつもつもつもつもつぽ!」

欲望の赴くままに春那の後頭部を押さえると、腰を振って喉奥を繰り返し突く。まるで膣を犯している時のような激しさで肉槍を突き込んだ。

これに最初は驚くような、苦しむような表情を姉が浮かべる。

けれどもそれはあくまでも最初だけであり――。

「んっじゅっ！ もっじゅ……むっむっむっちゅ……はぶっ……もふっ……んじゅるっ、むちゅむちゅむちゅっ……んぼおお」

しばらくするとこちらの動きに合わせるように頬を窄め、舌を這わせてくれた。

口唇の心地いい締めつけと、艶めかしい吸引行為。絡みつく舌の淫靡な感触――すべてが性感となり、射精衝動を増幅させる。

「射精るっ！ 射精るよっ!!」

最早我慢することなどできそうになかった。

「い、いいじよ……らっしえ……わらひのくひに……たくしゃんらしゅんら」

「ああああ……いい！ いいよ！ いいよおっ!!」

本能の赴くままに腰を振って振って振りまくる。

じゅずぼっじゅずぼっじゅずぼっじゅずぼっ！

「あつぶ……むじゅっ、あぶあつ、おっびゅ……むぼおっおお！ んじゅるっ、むちゅるる。んじゅるるう」

一突きごとに膨張していく肉棒。

そして――。

「絶頂くよっ！ ねえちゃん！ 受け止めて!!」

ズンツと喉奥を突いた瞬間、射精衝動が爆発する。膨れ上がった肉先が口を開き、



ぶびゅぽっ！ どびゅっ！ どっびゅどっびゅどっびゅどっびゅどっびゅるるっ！！

「あつもっ！ もぽっ！ おっおっおっおっ——むぼおおおっ！！」

姉の口腔に多量の白濁液を流し込んだ。

「んっぎゅ……むぎゅううっ！」

何度も射精してきたというのに、その量は尋常なものではなく、一瞬で春那の頬が内側から膨らむほどのものだった。

それでも姉はすべてを口腔で受け止めてくれたうえ——。

「んっぎゅっ……ごきゅっごきゅっごきゅっごきゅっ……んげほっ……んじゅるるう」

喉を鳴らして飲み干してまでくれた。

「あつぶ……あっあっあっあっ——んびゅあああああ！」

やがて肉棒を咥えたまま姉は身体を震わせる。

どうやら精液を飲んだだけで達したらしい。

「あ……はふぁ……ちゅぽっ……はあっはあっはあっ……な、なかなか美味かったぞ」

ペニスを口腔から解放し、肩で息をしつつ、口端から白濁液を零しながら微笑みを浮かべてくれる。

肉汁を垂れ流しながら、艶やかな唇を半開きにし、はあはあと熱い吐息を漏らす。分泌された汗で前髪をべっとりと額に張りつかせながら、瞳を潤ませつつ、切なげに眉根に皺を寄せる。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※ 二次元ドリーム文庫とは異なる。未満の方購入できません。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



ヴァルキリー

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry

<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille

<http://www.mille-feuille.jp/>

モバイル二次元ドリーム

<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!